超高齢化社会におけるアートの存在意義
Significance of Art in a Super-Aging Society

河原　啓子
KAWAHARA Keiko

アートと老化について考察された研究はあまり多くない。しかし、アートは人の精神に与える影響が強いゆえに、アートと高齢化社会の関わりについて検討することにした。ここでは、高齢について考察し、アートやその鑑賞の本質的な意味について確認をしたうえで、ホールやミュージアムといった文化施設や、マネジメントの方法などを勘案し、高齢化社会におけるアートの有効性について探った。まず、高齢期は総体として実に独特な時期であることがわかった。そして、アートは、人々に柔軟な考察力を可能にすると同時に、内的な豊かさ、身体的な活性化などをもたらす。また、老いの困難に立ち向かってきたアーティストの生き方も興味深い。高齢者にとってアートは有効であると同時に、文化施設は老いを共有する重要な拠点になることが期待される。

キーワード：超高齢化社会、〈人間の図書館化〉、文化施設、アート・マネジメント、生涯学習

はじめに

高齢化社会が進展している。日本の人口は、2017年10月１日現在、１億2,671万人で、65歳以上人口は、3,515万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）は27.7％に達した。15～64歳人口は、1995年に8,716万人でピークを迎え、その後減少に転じている。総人口は、2053年には１億人を割って9,924万人となり、総人口が減少する中で65歳以上の者が増加することにより高齢化率は上昇を続け、2036年に33.3％で３人に１人と見込まれている[(1)]。少子高齢化時代を経て、これまでの歴史で経験したことのない超高齢時代の到来が予測されている。

そのような中で、高齢期の研究は不可欠になっている。老年学として体系化された研究領域では、自然科学、人文学、社会学などの専門領域から老年について考察が行われてきた。生物学、医学、栄養学、看護学、法学、歴史学、社会老年学、経済学など、多様な専門領域の切り口から研究が進められている。これらの研究を総覧できる『新老年学』（第３版、東京大学出版会、2010年）では、生物学、医学の領域に紙面を多く割いているのがわかる。しかし、人間の老いを考える場合、比較的可視化しやすい老化だけではなく、ひとりひとりの人生の送り方や生活習慣などをもたらす精神面からの考察が不可欠である。そして、そのアプローチは肉体的な老化の原因と関連している可能性もあり、老化そのもののメカニズムに関わるかもしれない。

アートと老化について考察された研究はあまり多くない。しかし、アートは人の精神に与える影響が強いゆえに、アートとの関わり方やアートの高齢化社会での活かし方を検討することは決して無駄ではないであろう。

ここでは、まず高齢とは何かについて考察し（1　高齢期とは）、次にアートやその鑑賞の本質的な意味について確認をする（2　アートとは）。最後に高齢化社会におけるアートの有効性について探る。これからの社会においてアートがどのようにその存在意義を提示できるかについて、ホールやミュージアムといった文化施設や、マネジメントの方法などを検討し、高齢者とアートの関わりについて考え、今後の社会とアートの関係性についての展望を示してゆく。同時に高齢化社会が何をもたらすかについても吟味したい（3　高齢化社会におけるアートの有効性）。

なお、ここで用いる「アート」の概念は、「人間による創造物であり、人の内面に直接働きかける作用のあるもの」とする[(2)]。同時に「アート」としたのには、音楽、美術、映像といった従来「芸術」としてとらえられてきた概念と峻別するねらいもある。

1　高齢期とは

社会は老いというものをどのように理解してきたか。そして、人は老いるといかなる心境になるのか。加えて、高齢期の健康維持の実際についても目を向けてみたい。

1）老年のとらえ方

まず、歴史をひも解くと、現代のような高齢化社会ではなくとも、人が老いをさまざまにとらえてきたことがわかる。いつの時代も年を重ねることについては、ネガティブな価値観が優位である。心身の衰えによる苦痛と、社会からの冷たい反応といった現象が、老いに対する嫌悪と畏怖を人々に感じさせてきた[3]。一方で、高齢の時期に希望を見出すこともなされてきた。プラトン『国家』では、愛欲といった類の情念から解放された老年期は、「端正で自足することを知る人間でありさえすれば、老年もまたそれほど苦になるものではない」[4]とされている。また、キケロは、老人が惨めだと思われる理由を４点あげている。[5]「第一に、老年は公の活動から遠ざけるから。第二に、老年は肉体を弱くするから。第三に、老年はほとんどすべての快楽を奪い去るから。第四に、老年は死から遠く離れていないから。」その上で次のように述べている。「己の権力を保ち、だれにも隷属せず、息を引き取る瞬間まで一族を統べ治めてこそ、老年は尊敬に値する」[6]。「まっとうに生きた前半生は、最後にいたって権威という果実を摘むのだ。」[7]「老人が死ぬのは、燃え尽きた火が何の力を加えずともひとりでに消えてゆくようなもの、と思えるのだ。」[8]「老年には定まった期限がなくて、義務の奉仕を果たし続け、しかも死を軽んじることができる限り、立派に生きていけるのだ。」[9]つまり、老年期は、生き方次第で至上の時期になりうると言うのである。キケロのこの主張は、その後の多くの人々の光明であった。18世紀にも、年老いた顔や頭の表現が画家たちの描写力を示すことになるなど、芸術表現において老いに尊敬のまなざしを向けるようにもなった[10]。そして、19～20世紀には、医学的な進歩や、社会システムの改善などにより、高齢者はさらに若々しく快い日々を送るようになっていった。

老いをどのようにとらえるかについて、高齢化社会が進んでゆく20世紀、先駆的に深い考察に挑んだのが、シモーヌ・ド・ボーヴォワールだった（**図１**）。高齢期は一瞬のうちに訪れるものではないために、独立したカテゴリーとしてみなされていないことが、人々が老いに目を背ける一因になっていることを指摘した。老いたことに気づいた時には、死よりはましだという一つのあきらめのような認識に変容するが、そのことは見ないふりをされ、抽象的にしかとらえられてこなかったと指摘している。人々の未来に待ち受けている老齢期は、老人をまるで廃品扱いするような社会に生きることであり、人が人生の終末期に人間らしくあるために徹底した変革が必要だと主張した[11]。ボーヴォワールは、老年期は、人の時間や社会に対する関係を変容させ、肉体が衰退するなどの変化により、弱い立場へと推移させるとした。しかしながら、肉体と精神の最盛期は同時期ではなく、社会の価値観もさまざまであるので、老いというものは生物学的のみならず、文化面の視点も必要で、全体的にとらえる必要があると述べている[12]。ボーヴォワールは、芸術家、文学者、政治家などのさまざまなケーススタディをし、歴史、社会、文化といった側面から検討を行った。そして、生きることの対極にあるのは死ではなくむしろ老いであり、老いはその人の人生の運命的な側面を明確にさせ、その人本来の姿を顕在化させると言う。その時を哀れなものにしないために、人は準備をすることが必要で、一方、社会はその存在を人間として扱わねばならないと主張する。老年期特有のバランス感覚と経験に基づく可能性も忘れてならないとし、それが人生を変えることに他ならないと結ぶのである[13]。

図１　シモーヌ・ド・ボーヴォワール　http://beyondwordslitfest.co.uk/daughters-of-de-beauvoir-2-simone-de-beauvoirs-legacy/（2020年４月６日閲覧）

これまでに展開されてきた老年期のとらえ方は、現在もなお受容可能なものと、歴史、文化、科学などの進展によって変容するものがある。個人や社会の価値観によってもさまざまである。そうではあれ、老年期

は人生の中でほかにない独特な時期であり、その時期に意識を向けることが、この高齢化の進展において必要であるのは明らかである。また社会は、老年期の人々に対するまなざしを柔軟にする必要がある。知的処理能力や運動能力が衰退した老人は、とかく社会の重荷としてとらえられる。しかし、誰にでも訪れるであろう老いを社会の重荷と認識した時点で、その社会は高齢者のみならず弱者全体を抹殺してゆく忌々しき方向へ向かう。高齢者のとらえ方を考えることは、実は高齢者に特化しない重要な問題も孕んでいるのである。社会は、一見弱者に見える人々に対してどのように考えることができるだろうか。まず、その対象は私たちに弱さをはっきりと理解させてくれるありがたい存在であることを認識するべきであろう。そして、その人々の持ちうる知見の貴重さに気づくことである。老年期には、たとえ身体が脆弱になろうとも、内面には何層にも重なった豊かな経験知がある。それを〈人間の図書館化〉と呼びたい。高齢化社会においては、個性あふれる生きた図書館が数多く存在しているのである。実はそれが社会をけん引する可能性を大いに秘めているものでもある。その存在意義を広く人々は共有しなければならない。

2）高齢者の心境

それでは、老いることによって人はどのような心境になるのだろうか。精神分析学からのアプローチを参照してみたい。老年期に特徴的に表れてくる現象は、身体能力の衰退である。そのことによって、人はアイデンティティの混乱に直面する[14]。自己の自律の範囲が圧縮されることによって、依存を余儀なくされることも起こる。そして、老人は、以前のような自律的な自己を維持するために闘うことになる[15]。それは、不活発とうつをひき起しやすいが、現実的に評価するならば妥当な依存に順応できるようになると考えられている[16]。老人は長く生きてきたその「記憶の保存者（先の〈人間の図書館化〉に相当する）」たる存在で、それを用いていかに身体的な崩壊に対応するか、絶え間なく訪れる喪失とどう適応するか、という課題を突きつけられるのである[17]。

また、高齢期にしばしば訪れる心境が孤独感である。老年期には社会との結びつきが重要であるとされている[18]。しかしながら、健康にも影響を与える孤独感を克服するために、場合によっては人間関係のストレスが伴う社会参加が必須かについては検討する必要がある。孤独と孤立は異なり、大勢の人々の中にいてこそむしろ、孤独感が認識されるという考え方もある。処理能力をはじめとするさまざまな側面で減速してゆく老年期には、精神を高めながらじっくり自分らしさと向き合い、これまでの人生になかった自由な時間を持つこともできる[19]。あえて、外交的な社会活動を行わずして、買い物や支援者とのつながりといった日常必要不可欠なコミュニケーションのなかで、各個人が自分に一番適切な社会とのつながりを構築することも可能である。

私たちは、このような老いの心境から生ずるさまざまな現象を学んでゆく必要がある。身近な家族や知人の言動は、その生きた教材として位置づけられる。そして、その事例を広く共有することによって、老いの理解を深めることは、これからの社会を生きる人々にとって必須の学習になってゆくはずである。

3）高齢者の健康

身体機能の低下は免れ得ないとはいえ、そのありようについては、医学の発展とともに変容し続けている。高齢者は病気がちで新たな知識を獲得しにくく、元来の体質を変えることはできず、エネルギーが減退し、社会のお荷物になっているといった通念にはすでに疑問が投げかけられており[20]、健康を保持する方法や高齢期特有の心身の状態についてさまざまな考察がなされている。高血圧症と糖尿病の予防に注意を払うこと[21]、「通常の老化」とされる臓器機能と免疫低下や高脂血、高血糖、高血圧といった危険な兆候の影響に目を向けることが重要とされる[22]。特に関心が寄せられるのは、記憶に関わる知的機能低下である。しかし、加齢に従って低下するのは、具体的な名前や数字といった記憶する意思を必要とする顕在記憶力であり、他の記憶力はほとんど低下しないことがわかっている。学習して身につけた“年の功”ともいえる経験に基づいた知識、すなわち作動記憶は、ほとんど衰えない。ゆえに、加齢による知的機能の低下はごく一部の機能に限定され、個人差も大きく多元的にとらえる必要があるとされている[23]。適切な訓練や個人にふさわしい周りからの支援によって、約20年間の記憶力の低下の補完が可能だともされている。周りの支援として高齢者に特有の注意点は、若者より成功体験に反応しにくいため、褒め言葉を多用することが求められている[24]。

脳の機能については、興味深い事例報告がある。脳の大半がアルツハイマー病におかされていた高齢者が最晩年まで認知力テストで上位の好成績をあげていた

のである。これは、脳の提供を疫学者に提供することに同意していたミネソタ州のノートルダム修道女会に所属する、1996年に心筋梗塞により85歳で死去した修道女のシスター・バーナデットのケースである。アルツハイマー病でありながらも、精神機能や身体機能の低下といった痴呆の症状が全く表れていなかった珍しい事例は、数が多いとは言えないまでも存在している[25]。

健康維持のために運動が有効なことは周知だが、脳の活性化のためにも運動が推奨されている。運動は、心血管系と脳を同時に使うことができる。脳の回路の結合、血液量を増大させて血管を強化し、ニューロンの活動の発生を促進、細胞の衰弱の逆行、意欲システム信号の伝達物質として知られるドーパミン量の回復、炎症の抑制などに役立つ[26]。老化の進行を完全に停止することは不可能だが、老いのありようを快い方向に制御することは可能なのである。

このように、1)、2)、3）の側面を考えると、高齢期が総体として実に独特な時期であることがわかるのである。

2　アートとは

それでは、アートとの関わり方やアートの高齢化社会での活かし方を検討するために、アートとは何かについて確認したい。人類は、音楽や美術といった創造活動を長く続けてきた。その理由を考えながら、アートの有効性を確認してみたい。

まず、ネガティブ・ケイパビリティの側面である。ネガティブ・ケイパビリティとは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」、あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確実さや不思議さ、懐疑の中にいることができる能力」[27]を指す。人間は理解をしようとする脳の働きを持つが、社会では、例えば不測の災害や緊急事態といったその発生理由がわからない事態が発生する。人生において、そのような事態から完全に回避することは不可能なことであるから、人はそれを耐え忍ぶ必要がある。ネガティブ・ケイパビリティに着目した見地では、そのような力を育むのがアートとしている。音楽や抽象画は、分かるということを前提にしていない。「答えを出してはおしまい、というような深みを音で追及」するのが音楽であり、「わかることを拒否して、そのずっと奥の心のひだまで音は到達して、魂を揺さぶる」。抽象画は、「わかることを拒否したうえで、さらなる高みで感覚に訴える」[28]。または、「旋律という現在という瞬間を超えた広がりを持つ」内面（「《たましい》」）に訴えかけるものは、いわば「現世から疎外されている」。「この疎外、つまり直接には聴こえない、見ることができない、という不能性こそが音楽ひいては芸術を理解する能力、何かと共感する能力の源になっている」[29]。現実とは異なる創造世界を享受することが「疎外」であり、この「疎外」を生じさせるのがアートと言うわけである。このような、ネガティブ・ケイパビリティなどの見地からアートを考えると、緊急事態を克服する“精神的バリアー”を形成させる独自領域であるところに、その存在意義を認めることができるのである。歴史の中で人々が音楽や美術を受容してきたのは、意識的には感動経験を求めてきたと同時に実は暗黙のうちに危機管理をしていたととらえることもできるだろう。人間の感情を分析する研究の進展によっては、ネガティブ・ケイパビリティを育む音楽の具体像も明らかになるかもしれない[30]。

また、「ことばで伝えられないものを、視覚で伝えることができる」美術作品は、「美しさや表現力を説明する適切な言葉を見つけられない事態」[31]をひきおこすと考えられている。ここでは美術をとり上げて論じているが、「適切な言葉を見つけられない事態」は、アート全般において発生するので、それが実は人間にとってアートを不可欠な対象にしてきたと考えられる。

一方、アートが独自の領域として位置づけられてきたのは、美、希少性、権力者やインテリゲンチアに受容されてきた歴史などと不可分である。人は美にあこがれる存在であるし、美術作品のように１点のオリジナルに原価とは比べものにならない価値づけがされる稀少な側面もある[32]。そのために歴史的には限定された人々にのみ、享受が許されてきた作品も多い。アートの理解は、教養を地盤にした解釈を要するものもあるために、その受容者にある種の高いステータスを付与する。アートは、ある種の神格化存在として[33]、価値づけされてきたという優位性も持ち合わせているのである。このような点からも、アートが特有の領域であることがわかる。

さて、現代アートにおいては、「人が見えていない世界の先取り」、「問いを見つけるセンス」、「先入観や固定観念を壊す」、「自分の内側から湧き上がるものに向き合う」、「常識を疑い、ゼロベースで考える」、「思考の罠を脱出する」[34]などといった、独特な有効性が指摘されている。人類が、数値化された実利性に乏しいアートの鑑賞を続けてきたのも、このような理由

も考えられる。人は、発展的な人生を送りたいし、そのためには発見と刷新が不可欠であろう。それをもたらしてくれるのが、アートなのである。

またアートは、数値化された実利性に乏しいように見受けられるが、アートの有効性が認められた脳科学分野の研究結果もある。人は老いても脳に刺激を与えることでニューロンが活性化され、年齢とともに低下する神経の可塑性を活性化し、老化を抑制することができる。音楽においては、後天的な音楽経験によって、生まれ持った遺伝的要素とは別に、音楽的に成長してゆく。絶対音感とは別に相対音感を育むことが大脳の神経回路を強化する。このメカニズムは、音楽のような聴覚系、美術のような視覚系ともに、特有の神経回路を形成するという[35]そして、歌唱においては、左脳の言語野と右脳の音楽野を同時に使う特徴がある[36]。また、黄金分割のような人に心地よさを感じさせる視覚創造は、脳における刺激選択制を最大化する。アートを人間が鑑賞することは、聴覚、視覚などを用いて美を受容することであり、脳は自らを喜ばせるために美を感じようとする[37]。美を感じることは、脳の報酬系の一部を活性化する。脳にとって芸術がもたらす独特な作用があることがわかってきたのである[38]。

愛好者たちは暗黙の了解として意識化してこなかったが、アートが人類の歴史の中で長く愛されてきた理由はさまざまに存在していることがわかる。社会において、そしてすべての人々にとって、アートが必要不可欠なものであることが、広く認識されることが求められる。

3　高齢化社会におけるアートの有効性

1）文化施設のアート・マネジメント

高齢化が進む社会において、アートは、生涯学習の一環としての有効性を認めることができる。それは高齢者層に限定されない。さまざまな年齢層が共に学ぶ、ワンルーム・システムは、それぞれの層に利益をもたらす。高齢者は若者から喜びを見出し、若者は高齢者から過去の知見を学ぶことができるからと考えられている[39]。そしてアートは、多様な潜在能力を持つ人々に広い範囲の学習経験を保証する。この創造の刺激は、老年者にとっても知的にも審美的にも大きな豊かさをもたらす。「芸術は、あらゆる感覚――視覚、聴覚、触覚、味覚、全筋肉組織の運動感覚――が刺激を受ける舞台装置」であり、「人と物の世界において、老いゆく身体が創造的であると同時に活発な関わりをもって行動するものとなるための敏捷さと能力が持てるように、これらのアンテナが精いっぱい活動しているのだと感じる満足感が老いゆく人には必要である」[40]。老化の長い期間を創造的生き方のできる時期と考えることができ、新しい活動の摸索のなかで、アートは少なくない影響を与えると言えよう。ここでは、アートの実践の側面から考察されているが、すでに述べたようにそもそも人類がアートを求め続けてきた歴史を勘案すると、アート鑑賞もまた今後の社会における重要な生涯学習のひとつであり、人生に不可欠な役割を果たすものとして位置づけることが可能である。

ホールやミュージアムといった文化施設は、アートの授受の重要な拠点である。高齢者にとってのアートの受容性を踏まえれば、文化施設のマネジメントは、今後、超高齢化社会を見据えることが不可欠になると考えられる。それでは、どのようなマネジメントが求められるだろうか。まず、参加型のプログラムは重要である。ホールであれば、演奏者とともに歌ったり手拍子足拍子をしたりするような内容の公演である。ミュージアムであれば、双方向型のギャラリートークや制作ワークショップなどである。また、このような場所に出向くことが、高齢者にとって身体機能を使い、コミュニケーションが形成され、社会参加をもたらすといったメリットもある。マネジメントとして、高齢者が参加しやすい時間、アクセス、プログラム内容などを考案する必要がある。イギリス文化振興会の「お出かけプログラム」という事例では、定額料金を支払うと劇場や文化施設に行くときのタクシー料金の大幅割引を行った。また、高齢化に伴い、祖父母と孫をターゲットにした経験型のイベントの開発も求められている[41]。

2）高齢化によってもたらされる新たな価値観

高齢期層が増大することにより、社会の価値観が大きくシフトすることが予測される。そして文化施設は、高齢者の内的創造性を促進し、独特の価値観を共有する場になると考えられる。その際には、高齢者の発信する知見の意義を、社会が受け止める必要がある。社会は、最新知識を重視する傾向が強い。高齢化はそのような価値観を揺るがす契機になりうる。一部のテクノロジー分野には当てはまらないかもしれないが、人間の関与する全般的な領域では高齢者の見解を無視することは大きな損失になりうる[42]。

また、アーティストが高齢期とどのように向かい合ってきたかをふり返ることも、人々の老いの困難に

対する処方箋になりうる。次に、いくつかの事例を挙げよう。

アーティストによる高齢を超克するイノベーションは、各人各様である。ピアニストの舘野泉は、左手のみのピアノ演奏の地平を拓いた。舘野は、2002年に演奏会のステージ上で脳溢血により倒れ、右半身不随となった。治療を続ける中で、フランク・ブリッジの《左手のための三つのインプロヴィゼーション》に出会った。それは、「自分自身を閉じ込めていた氷河が一瞬にして溶け、青い大海原が目の前に現れたよう」で[43]、「手が伸びて楽器と触れ、世界と自分が一体となる。音が香り、咲き、漂い、爆ぜ、大きく育って一つのまったき姿となって完成する」[44]感覚を覚えさせるものだった。彼は、ここで次の大きな発見をした。「ピアニストとして戻れるのは右手が動くようになってからと思っていたが、音楽をするのに、手が一本も二本も関係はなかった」[45]。そして舘野は、「音楽そのものをしている充実感」を感じ、「片手で弾いていることさえ忘れ」、演奏をするようになった[46]。そして、バッハ－ブラームスの《シャコンヌ》演奏を公演で行い、「今はバッハがごく自然に弾けた。左手だけで音をたどっていくと音楽の本質が何の飾りもなく、それでいてゆたかにあらわれてくるのであった。それは、もしかすると左手による演奏の際立った特徴かもしれない」と[47]いう思いに至った。2004年に左手のピアニストとして復帰して以来、舘野は、間宮芳生、ペール・ヘンリク・ノルドグレン、吉松隆といった作曲家の左手ピアノ曲に取り組み、「舘野泉左手の文庫（募金）」を設立して、同じ境遇のピアニストの支援活動もしている。舘野が言うように、左手のピアノ演奏は、音の深い思索をもたらす独特な味わいがある。通常行われる両手演奏に慣れた聴衆の耳をリセットし、新たな世界に誘う力がある。これまでにも左手演奏を余儀なくされたピアニストたちには、不慮の銃の暴発で右腕を失いヨーロッパ諸国で左手曲の作曲やフランツ・リストの楽曲を左手用に編曲した作品などの演奏活動をしたゲザ・ズィチ（1849～1924年、ハンガリー）、戦争で右腕を失いモーリス・ラヴェルに左手の曲（《左手のためのピアノ協奏曲ニ長調》）を依頼した、パウル・ヴィトゲンシュタイン（1887～1961年、オーストリア）といった人々がいるが、舘野の存在は、音楽の世界にとどまらず、この高齢化社会において、既存の価値観を（ここではピアノ演奏＝両手）壊すことによってのみ、発露する世界があることを顕在化している。

同じように、画家のアンリ・マティス（1869～1954年、フランス）は、腸の大手術によって衰弱し、油絵を描くこともままならなくたったとき、「切り紙絵」という彩色された紙を切り張りつけながら作品を制作する独自の表現法に移行した。彼は、具合の悪いことがあっても納得できる側面を探し、「うまくいかなくても満足できる」という心境で制作を続けた。「切り紙絵」の方法で制作された作品集『ジャズ』は、彼の晩年の代表作に数えられる。[48]

ピアニストのアルトゥール・ルービンシュタイン（1887～1982年、ポーランド）（**図２**）も、80歳に至って演奏曲を選択し、以前より時間をかけて練習し、演奏速度を調節することによって演奏の質の保持を目指していたことが知られている。ルービンシュタインのこのような姿勢は、老年学にも影響を与え、高齢期のさまざまな困難克服のモデルになった。選択(Selection)、適正化(Optimization)、補償(Compensation)の三要素(SOC)を連動させることによって、有効性の高いライフマネジメントが可能になるとされている。ルービンシュタイン晩年の場合における、限られた作品の演奏(Selection)、練習時間を拡張する（Optimization）、早く弾くべきフレーズの直前にテンポを遅くすることでテクニックをカバーする（Compensation）姿勢がこれに相当する[49]。アーティストの言動や作品は、超高齢化社会に有効な臨床心理学の検体にもなりうる。

図２　アルトゥール・ルービンシュタイン
http://pacem.web.fc2.com/performer/pianist/rubinstein.htm（2020年４月６日閲覧）

ネガティブにとらえられがちな老いについて、立脚点を変換してとらえたアーティストもいる。美術家で著述家の赤瀬川原平（1937～2014年、日本）は、老人の未知の力を解き明かした。彼は、「老人力」として、これまでマイナスととらえられてきた現象を独特な力としてとらえた。例えば、赤瀬川が「物忘れ・イズ・ビューティフル」と言うのは、もし忘れることができ

なかったら人間は実に苦しむだろうという発想の転換による[50]。

今後の高齢化社会においては、私たちはこれまでとは異なる対応と価値観の構築が必要になる。老年層が増加する社会では、未知の現象への不安と直面しながら、多様性を認めてゆくことが必要である。アートは、人々に柔軟な考察力を可能にすると同時に、内的な豊かさ、身体的な活性化などをもたらす。超高齢化社会において、高齢者にとってアートは有効であることがわかった。同時に文化施設は、社会を見据えてアート・マネジメントを行うことによって、老いを共有する重要な拠点になるであろう。そこでは、老年者の内的優位性の意義を社会全体が評価することを促進し、高齢者が自らに起こる特有の老いという現象を共有できるよう発信あるいは表現する場になりうる。今後、社会の中でのアートの位置づけに新たな視点が加わると思われる。アートや文化施設が、このような大きな時代変化を乗り越えるプラットフォームの役割を果たしてゆくことを願いたい。

註

（1）内閣府ホームページ https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_1_1.html　2020年３月７日閲覧

（2）拙論「メディアとしての AI　新たなコミュニケーションを形成するアート」『武蔵野美術大学研究紀要2018年　№49 』62、67ページ参照。美学から芸術学を独立させて考えるようになったのは、19世紀のフィードラー（Fiedler, K.）の芸術論を始点とする。以来、デッソワー（Dessoir, M.）、ウーティッツ（Utitz, E）らによって、芸術学が提唱され、芸術ジャンルについても研究が進められてきた。研究史上の音楽や美術という領域は、20世紀に入り、コンセプチュアル・アートにみられるような表現メディアを限定しない作品が登場するようになり変容したと考えられる。そこで、拙論では従来の音楽や美術といった領域に限定せず、多様な表現を横断的にとらえる立場で、「アート」として概念化した。

（3）Thane (Ed) , Pat *The Long History of Old Age*, Thames & Hudson, 2006. パット・セイン『老人の歴史』木下康仁訳、東洋書林、2009年。紀元前から20世紀までの老年のとらえ方について述べられている。

（4）プラトン『国家・上』底本：J. Burnet, *Platonis Opera* Vol. IV, Oxford Classical Texts、藤沢令夫訳、岩波書店、1979年、22ページ。

（5）キケロ『老年について』底本：J. G.F.Powell, *Cicero : Cato Maior De Senectute*, Cambridge University Press, 1988. 中務哲郎訳、岩波文庫、2004年、22ページ。

（6）前掲、キケロ（中務訳）、40ページ。

（7）前掲、キケロ（中務訳）、61ページ。

（8）前掲、キケロ（中務訳）、66ページ。

（9）前掲、キケロ（中務訳）、67ページ。

（10）前掲、セイン（木下訳）、171、274ページ。

（11）Beauvoir, Simone de *La Vieillesse*, Gallimard, 1972. Trans. Patrick O'Brian *The Coming of Age* , W. W. Norton & Company, 1996, pp. 2~7.

（12）Ibid., pp. 9~13.

（13）Ibid., pp. 539~543.

（14）Erikson, Erik H. Erikson, Joan M. Kivnick, Helen, *Vital Involvement in Old Age*, W.W. Norton & Company, 1986. エリクソン, J.M.　エリクソン,　H.Q. キヴニック『老年期：生き生きしたかかわりあい（新装版）』朝長正徳, 朝長梨枝子訳、みすず書房、1997年、155ページ。

（15）前掲、エリクソン（朝長訳）、199、229ページ。

（16）前掲、エリクソン（朝長訳）、336ページ。

（17）前掲、エリクソン（朝長訳）、365 ～ 66ページ。

（18）Rowe, John W. Kahn, Robert L. *Successful Aging*, Random House, 1998. ジョン・W. ローウェ、ロバート・L. カーン『年齢の嘘』関根和彦訳、日経 BP 社、2000年、237、266ページ。

（19）五木寛之『孤独のすすめ』中央公論新社、2017年、12ページ。同『続・孤独のすすめ』同、2019年、10ページ。

（20）前掲、ローウェほか（関根訳）、28ページ。

（21）前掲、ローウェほか（関根訳）、82ページ。

（22）前掲、ローウェほか（関根訳）、92ページ。

（23）前掲、ローウェほか（関根訳）、203 ～ 204ページ。

（24）前掲、ローウェほか（関根訳）、212 ～ 214ページ。

（25）Ratey, John J., Hagerman, Eric *Spark : The Revolutionary New Science of Exercise and the Brain*, Hachette Book Group, 2013. ジョン・J・レイティ、エリック・ヘイガーマン『脳を鍛えるには運動しかない！：最新科学でわかった脳細胞の増やし方』野中香方子訳、日本放送出版協会、2009年、304ページ。Snowdon, David *Aging with Grace What The Nun Study Teaches us about Leading Longer, Healther, and More Meaningful Lives*, Bantam, 2001. デヴィッド・スノウドン『100歳の美しい脳　アルツハイマー病解明に手をさしのべた修道女たち（普及版・初版は2004年）』藤井留美訳、DHC、2018年、176ページ。

（26）レイティ他（野中訳）280、283、285、290、292ページ。

(27)帚木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版、2017年、3ページ。
(28)前掲、帚木、74ページ。
(29)岡崎乾二郎「聴こえない旋律を聴く」webちくま、2019年 8 月19日、https://www.webchikuma.jp/articles/-/1808、2020年3月7日閲覧。
(30)Harari, Yuval N., *21 Lessons for the 21st Century*, Spiegel & Grau, 2018. ユヴァル・ノア・ハラリ『21 lessons (トゥウェンティワン・レッスンズ) : 21世紀の人類のための21の思考』柴田裕之訳、河出書房新社、2019年、47～50ページ。音楽経験のビッグデータ利用の展望を指摘。
(31)Zeki, Semir *Inner Vision : an Exploration of Art and the Brain*, Oxford University, 1999. 河内十郎監訳『脳は美をいかに感じるか：ピカソやモネが見た世界』日本経済新聞社、2002年、28、31、34、35、37、41、58、61ページ。Zeki, Semir *A Vision of the Brain*, Oxford University, 1993. 河内十郎監訳『脳のヴィジョン』医学書院、1995年、16、367ページ。
(32)Abbing, Hans *Why are Artists Poor? : the Exceptional Economy of the Arts* Amsterdam University Press, 2002. 山本和弘訳『金と芸術：なぜアーティストは貧乏なのか？』グラムブックス、2007年、47ページ。アビングは、「芸術の神話体系」として「芸術作品は本物であり、アーティストはその唯一の創造者である」、「コストと需要から解放されたときにのみ、芸術的な特質が生まれる」、「ずば抜けた才能は稀なので、アーティストを蓄えた巨大なプールがあって初めて、ごくわずかの飛び抜けた才能あるアーティストを社会に共有することができる」、「数人のアーティストが稼ぐ高額な収入は正当なものである」などをあげている。
(33)前掲、アビング(山本訳)、77ページ。さらにアビングは、「芸術が持っている高いステータスのサイン」として、「とてつもない高収入をあげているアーティストがいる」、「寄付と助成は芸術における収入のかなりの割合を占めている」、「人々はアーティストを賛美し、羨ましく思っている」、「クラシック音楽のコンサートや近代美術の展覧会など、芸術作品が公的に消費される場合、鑑賞者には可能な限りの沈黙や静寂が要求される。この厳粛さは宗教儀礼に比肩される。」などをあげている。
(34)秋元雄史『アート思考　ビジネスと芸術で人々の幸福を高める方法』プレジデント社、2019年。アートの思考方法が、芸術領域以外にも有効であることが述べられている。
(35)小泉英明編著『恋う・癒す・極める　脳科学と芸術』工作舎、2008年、川村光毅「音楽する脳のダイナミズム」126～128ページ。
(36)前掲、小泉、小泉英明「脳科学と芸術の明日に向けて」392ページ。
(37)前掲、小泉、川畑秀明「脳はなぜ美に魅せられるのか」77、82ページ。
(38)前掲、小泉、小泉「脳科学と芸術の明日に向けて」383～384ページ。
(39)前掲、エリクソン（朝長訳)、343～344ページ。
(40)前掲、エリクソン（朝長訳)、345～346ページ。
(41)Bernstein, Joanne Scheff, *Arts Marketing Insights : the Dynamics of Building and Retaining Performing Arts Audiences*, John Wiley & Sons, 2011. 山本章子訳『芸術の売り方　劇場を満員にするマーケティング』英治出版、2007年、49ページ。
(42)前掲、ローウェ、216ページ。
(43)舘野泉『命の響　左手のピアニスト、生きる勇気をくれる23の言葉』集英社、2015年、14ページ。
(44)舘野泉『ひまわりの海』求龍堂、2004年、231ページ。
(45)前掲、舘野、2004年、231ページ。
(46)前掲、舘野、2004年、240ページ。
(47)前掲、舘野、2004年、241ページ。
(48)拙著『長寿と画家　巨匠たちが晩年に描いたものとは？』フィルムアート社、2019年、92～105ページ。
(49)Baltes, Paul B. Baltes, Margret M (Eds.) *The Psychology of Control and Aging*, Hillsdale, N.J. : Erlbaum Associates, 1986, pp.26～27. Baltes, Margaret M. *The many faces of dependency in old age*, Cambridge University Press, 1996, p .63.
(50)赤瀬川原平『老人力』筑摩書房、1998年、12ページ。

主要参考文献

Baltes, Paul B. Baltes, Margret M. (Eds.) *The Psychology of Control and Aging*, Hillsdale, N.J. : Erlbaum Associates, 1986.

Baltes, Margaret M. *The Many Faces of Dependency in Old Age*, Cambridge University Press, 1996.

Beauvoir, Simone de *La Vieillesse* ,Gallimard, 1972. Trans. Patrick O'Brian *The Coming of Age* , W・W・Norton & Company, 1996.

Abbing, Hans *Why are Artists Poor? : the Exceptional Economy of the Arts* Amsterdam University Press, 2002. 山本和弘訳『金と芸術：なぜアーティストは貧乏なのか？』グラムブックス、2007年。

Bernstein, Joanne Scheff, *Arts Marketing Insights : the Dynamics of Building and Retaining Performing Arts Audiences*, John Wiley & Sons, 2011. 山本章子訳『芸術の売り方　劇場を満員にするマーケティング』英治出版、2007年

Erikson, Erik H.　Erikson, Joan M.　*Kivnick, Helen, Vital Involvement in Old Age*, W.W. Norton & Company, 1986. エリクソン, J.M. エリクソン, H.Q. キヴニック『老年期：生き生きしたかかわりあい（新装版）』朝長正徳, 朝長梨枝子訳、みすず書房、1997年。

Thane (Ed) , Pat *The long history of old age*, Thames & Hudson, 2006. パット・セイン『老人の歴史』木下康仁訳、東洋書林、2009年。

小泉英明編著『恋う・癒す・極める　脳科学と芸術』工作舎、2008年。

帚木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版、2017年。

拙著『長寿と画家　巨匠たちが晩年に描いたものとは？』フィルムアート社、2019年。